※一部非公開

平成二十九年度入学試験問題（前期日程）

国　語

教育学部　学校教育教員養成課程　小学校教育コース　教科教育専攻
中学校教育コース　教科教育専攻　国語教育専修

注意事項

一、解答時間は、一〇〇分である。
二、解答は必ず解答用紙に記入すること。
三、受験番号を解答用紙の所定の欄に記入すること。
四、解答は縦書き、鉛筆（シャープペンシルを含む）書きにすること。

※非公開

一

次の文章は、東北地方の風土や文化を土壌として生まれた「鹿踊りのはじまり」(注1)という童話である。よく読んで、以下の各問に答えなさい。(三〇点)

(なお、現代においては不適切と考えられる表現が文中にあるが、文学作品の時代的意義に鑑み、原文のままとしている。)

※非公開

※非公開

※非公開

※非公開

※非公開

※非公開

※非公開

注
1　鹿踊り――東北地方の民俗芸能。鹿踊りの起源については諸説ある。
2　はんのき――はんの木に同じ。落葉高木。湿地や沼地に自生する。
3　口発破（くちはっぱ）――爆薬を仕込んだえさを撒（ま）いて肉食獣を爆殺する猟法。
4　うめばぢ――うめばちそうに同じ。花が梅の花を思わせる。

（出題の都合上、出典は省略する。一部改変）

問一　この童話の作者名を漢字で書きなさい。

問二　波線部a～eの漢字の読みがなを書きなさい。
a　糧　　b　環　　c　俄かに　　d　遁げ　　e　愕ろき

問三　傍線部②「鹿どもの風にゆれる草穂のような気もち」について、どのような気もちか、またなぜ「風にゆれる草穂のような」という表現が用いられているのか、説明しなさい。

問四　傍線部③「嘉十はちょっとにが笑いをしながら」について、なぜにが笑いをしたのか、説明しなさい。

問五　この童話の文体上の特色や魅力について解説しなさい。

問六　傍線部①「鹿踊りの、ほんとうの精神」とはどのような精神か、あなたの考えを書きなさい。

※非公開

二

次の文章は、竹内啓『偶然とは何か―その積極的意味』の一部分である。よく読んで、以下の各問に答えなさい。（三〇点）

※非公開

※非公開

（竹内啓、『偶然とは何か―その積極的意味』、二〇一〇年、岩波書店、一四一～一四七ページ、抜粋・一部改変）

問一　波線部a～eのことばを漢字で書きなさい。

a　げんかく　　b　けいしつ　　c　ひそ(んで)　　d　ばいかい　　e　かくぜつ

問二　空欄（　A　）に入る適切なことばを、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　破壊力　　イ　抵抗力　　ウ　精神力　　エ　駆動力

問三　「歴史の必然性」について、傍線部①「歴史の必然性とは、ある事件Aと先行する事件B（あるいはその時の状況X）との結びつきが必然的であること、つまりBが起これば（あるいはXの下では）必ずAが起こることを意味する」と定義されている。これは具体的にはどういうことか、本文の主旨に従って五十字以内で説明しなさい。

問四　傍線部②「歴史上の偶然とは、歴史の記述中でそのことが起こらないことが十分ありえたと想像される事実をいうと考えられる」とは、どういうことか。本文の主旨に従って説明しなさい。

問五　筆者は、歴史の必然性と偶然性を考察するために、傍線部③「偶然史観」、傍線部④「必然史観」の二つの「史観」を超えた主張を本文全体で展開している。その主張を簡潔に説明しなさい。

三　次は、後深草天皇に仕える女房であった弁内侍（べんのないし）が著した『弁内侍日記』の一節で、中央貴族であった「土御門（つちみかど）中納言」の言動について記した場面である。本文と注をよく読んで、以下の各問に答えなさい。（二五点）

※非公開

（新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』、一九九四年、小学館、一七五～一七七ページ、抜粋・一部改変）

注

1　院――後深草天皇の前帝にあたる後嵯峨上皇。
2　勾当内侍（こうとうのないし）殿――作者と同僚の女房。
3　切簾（きりみす）――通常の半分ほどの長さの短い簾。
4　広御所（ひろごそ）――内裏で広間として使われていた部屋。
5　日給の御簡（みふだ）・着到――内裏での貴族たちの勤務状況や在・不在を示すために壁にかけた札。
6　主殿司（とのもんづかさ）――内裏の清掃や灯りなどを管理する女官。
7　霊山（りやうぜん）――現在の京都市東山区にある正法寺。
8　懸路（かけぢ）――険しい山道。
9　熊野――修験道の聖地。
10　大納言殿――作者と同僚の女房。

問一　傍線部①・③を、それぞれ現代語訳しなさい。

問二　波線部a～dのうち、他の三か所とは主語が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　波線部a　　イ　波線部b　　ウ　波線部c　　エ　波線部d

問三　傍線部②「直衣」・⑤「気色」の読み方を、現代仮名遣いで答えなさい。

問四　傍線部④「べし」・⑥「やる」は基本形のままになっている。それぞれ、この本文にふさわしい活用形に直しなさい。

問五　A［ぬ］とB［ぬ］の文法的な説明として適切なものを、次のア～クの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　過去の助動詞の終止形　　イ　完了の助動詞の終止形　　ウ　打消の助動詞の終止形　　エ　推量の助動詞の連用形

オ　過去の助動詞の連用形　　カ　完了の助動詞の連体形　　キ　打消の助動詞の連体形　　ク　推量の助動詞の連体形

問六　傍線部⑦の和歌の説明として正しいものを、次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　「旅衣」は「たち」を導く枕詞である。

イ　「たち」は「(旅に)立ち」と「(衣の縁語である)裁ち」の掛詞である。

ウ　「あらましかば」は反実仮想の表現だが、この和歌では受ける言葉は省略されている。

エ　「あらましかば」は文末の「悲しき」と呼応して「もしもそうならば悲しい」という意味となる。

オ　この和歌は三句切れで、上三句と下二句が倒置の関係になっている。

問七　「六月一日」の「土御門中納言」の様子が普段と異なっていたことについて、その理由を本文に即して六十字程度で説明しなさい。

四　次は、「閑吟」と題された七言古詩（律詩における押韻や対句の原則は当てはまらない）である。読んで、以下の各問に答えなさい。（一五点）

※非公開

（参照した原典を一部改変。なお出題の都合上、出典は省略する。）

注　1　營營――第一句の「汲汲」とほぼ同義。あくせくするさま。
　　2　翫――愛でること、賞美すること。

問一　空欄 A と空欄 B に入る漢字の組合せとして適切なものはどれか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　A＝民・B＝栄　　イ　A＝窮・B＝富　　ウ　A＝苦・B＝楽　　エ　A＝居・B＝住

問二　傍線部①を現代語訳しなさい。

問三　傍線部②を「朝廷に在りて山に入らずと雖も」と訓読する場合、返り点の付け方として適切なものはどれか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　雖二在レ朝　廷一不入レ山

イ　雖下在二朝　廷一不中入レ山

ウ　雖三在下朝　廷上不二入レ山

エ　雖下在二朝　廷一不レ入レ山

問四　空欄 C に入る漢字一字を答えなさい。

問五　この詩の内容として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　作者は、朝廷の職を追われて貧しさに苦しんでおり、季節ごとの美しい風景を楽しむ余裕もない。

イ　作者は、政治に興味がないため、朝廷に官を得ようと努めることもなく、のどかに暮らしている。

ウ　作者は、朝廷への勤務を続けているものの、自分の心を満たす楽しみを失わないよう努めている。

エ　作者は、衣食住に欠く貧しい人々の生活を憂いて、朝廷に対して抗議の気持ちを持ち続けている。

問六　この詩の作者は、『枕草子』に引用された「香炉峰雪撥簾看」の句や『源氏物語』の内容に影響を与えた詩「長恨歌」などで知られる中唐期の詩人である。その名前を漢字で答えなさい。

平成二十九年度入学試験（前期日程）　国語　解答例

一

問一	宮沢（澤）賢治
問二	a　かて b　わ c　にわ　かに d　に　げ e　おど　ろき
問三	未知なるものに好奇心いっぱいで近づき触れたいという気持ちと、人間が仕掛けた口発破で殺された狐の記憶に拠る恐れや怯えという相矛盾した鹿の繊細な気持ち。人間である嘉十に異界の存在である鹿の声が聞こえてくる不思議と、記憶にある根源的な恐怖をなんとか超えようとするときの鹿の繊細さを表すため。
問四	嘉十は「自分と鹿とのちがいを忘れて」鹿と一体化し、鹿踊りの環に加わろうと飛び出した。しかしそれはあくまで一方通行的な一体感にすぎず、鹿達ははるかに遁げていった。自らの一体感が幻想に過ぎず、鹿踊りの環に加われないことに気づかされたため。
問五	東北方言による会話や童歌が用いられ、東北の風土に根ざした民俗芸能の起源に想像力豊かに誘われる。独特なオノマトペや美しい自然の描写により、自然と一体化して溶け込んだ鹿踊りの、神々しくも躍動的な様子が生き生きと伝わってくる。
問六	鹿達は、お日様の恵みがもたらす自然の神秘的な美しさを愛おしみ、自ずと拝んでいる。そして自然の一部として生きる歓びを環になって激しく踊り、表現している。そうした自然の神秘を愛おしみ、畏敬する念やその一部として生きる歓びが、「ほんとうの精神」であると考える。

二

問一

a 厳格

b 形質

c 潜んで

d 媒介

e 隔絶

問二

エ

問三

人間の行動によって生みだされた事件の連関から生じた一定の方向性が歴史の必然と捉えられるということ。

問四

歴史上の事件に、それが起こる何らかの理由があったとしても、当時の社会の歴史的文脈には無関係で、特定の時や場所で起こったことに理由がないならば、それは歴史に対しては偶然であるということ。

問五

歴史には偶然の要因が働いており、それが歴史に与える影響の有無は、その時々の歴史的状況に強く制約されている。その偶然の要因が歴史に影響を与えた場合には、必然的に次の事件を生み出していくのであり、その事件の連関から生じた一定の方向性が「歴史の必然性」となる。

二

問一	①	夜番（遅番）だったのであろうか
	③	これほどの人もめったにいない（珍しい）
問二		イ
問三	②	のうし
	⑤	けしき
問四	④	べき
	⑥	やれ
問五	A	キ
	B	イ
問六		イ、ウ
問七		土御門中納言は翌日出家することを決意しており、自分の周りの人々やさまざまな場所など、何を見ても胸がいっぱいになったから。（六〇字）

四

問一　イ

問二　歳月は過ぎやすく、ゆったりとした時間は得がたい。

問三　エ

問四　花

問五　ウ

問六　白居易（白楽天）